郡市医師会長からの抱負

再度の負託に応えて

札幌市医師会

会長　松家　治道

五月朔日の御代替わりにより始まりました、新元号「令和」の元年６月８日に開催された札幌市医師会定時代議員会後の理事会において、会長として会務を負託されました。思いもかけず４期目となってしまいましたが、全力で会長職を務めさせていただきたいと思います。

私たち医療に関わるものたちにとっては非常に厳しい状況が続く昨今でございますが、新体制の元でも引き続き全力をもって懸案に対応して参ります。

今期は、昨年発生した胆振東部地震を教訓とし、災害時医療体制構築に向け、非常時電源設置助成制度や災害基幹病院との連絡体制および透析・HOT患者支援体制の創設を目指します。

地域医療構想におきましては、道内他圏域とは幾分状況が異なりますが、必要病床数および病床機能に自主的に収れんされるように情報交換・提供に努めたいと思います。また、６月の日医代議員会においても多くのご質問がなされましたが、外来医療機能偏在対策に名を借りた開業制限につきましては、そうならないよう、道に強い姿勢を持って対応したいと思います。

さらに、地域包括ケアの推進や在宅医療の確立に関しては、あくまでも患者さんや市民のため、諸事業を充実させてまいります。それと共に、認知症高齢者への対応にも札幌市認知症医療推進協議会等と連携を図りながら取り組んでいきます。

アドバンスケアプランニング、人生会議についても、ようやく医療提供者が市民とともに考える事が出来る状況になりつつあります。これも、会員・市民とともに方法論、プロセスなど考えていく所存です。

私たち札幌市医師会は会員数4,000名を超える大所帯ですが、一致団結して札幌市民が清適に暮らせるよう、また会員が安心して医療が行えるよう努力してまいります。このところ道内他の郡市医師会からの流入もありますが、郡市医師会同士の連携を図り情報交換をしてまいります。そのうえ北海道医師会をお支えすることができれば幸甚に存じます。

医師会長６期目

恵庭市医師会

会長　島田　道朗

「郡市医師会長・再選の抱負」の原稿を依頼されました。題名に若干にトゲがあるような気もしますが、実は私は、５期10年会長職を務めてきました。さすがに、あまりに長いので後任を探しましたが受け手がなく、６期目に突入してしまった次第です。

以前、所属する医局の同門誌に「医師会長は楽じゃない」と寄稿した事がありますので、一部抜粋します。

『医師会長の仕事は、主に市役所・保健所などとの調整、道医師会や郡市医師会の会議への出席など、公私に渡り時間を犠牲にしなくてはなりません。また、介護保険審査・生活保護の医療費審査・障がい者の認定審査員、学校医などの成り手をお願いするのですが、昨今は引き受けてくれる先生が少なく大変苦労しております。必要な職ですから、最終的に会長が引き受けることになってしまいます。実際、平日の日中の会議など、個人の開業医には荷が重いのかもしれません。ただ最近は、道医師会に行きますと、副会長の小熊先生はじめ理事にも同門の先生が多数おられますし、札幌市医師会でも、松家会長ほか同門の諸先生が身近に感じられて、大変心強く思っているところです。医師会長は楽ではありませんが、やりがいもあると自分自身に言い聞かせて、２年後には、お役御免を願っている今日この頃です。』（４年前に書きました）

また、「ポラリスを仰ぐ北の大地から」にも『道医の役員の先生も郡市医師会の会長さんたちも、日常診療が忙しい中、医師会活動に精を出されています。かたや、あまり積極的に医師会活動に参加されていない先生も多いと思われます。私は、郡市医師会長会議や、道医代議員の会議に出席した日は、仲間とススキノに繰り出すのが一番の楽しみであります。また、医療行政の情報や、裏話とかがいち早く耳に入ります。その他、いろいろ役得もあるかもしれません。まさに、私は踊る阿呆、同じ医者なら踊らにゃそんそん、なのであります。会員の皆様、積極的に医師会活動に参加しましょう。』と会長らしいことを書いた事もあります。あと２年、こういう気持ちで頑張る所存です。よろしくお願いいたします。

変貌を遂げる北広島

北広島医師会

会長　對馬　伸泰

今、北広島市が熱い。決して気温の話ではない。北海道ボールパーク（BP）で活気づいているのだ。2023年３月のオープンを目指し急ピッチで準備が進められている。敷地は37haを確保、核となる球場は10万㎡、地上４階地下１階で観戦位置が地上部分より一部掘り下がった臨場感あふれる席も用意されるという。最上階では天然温泉につかりながら観戦できる。天井は切妻形で開閉式､芝は天然芝を使用。敷地内には公園のほかホテル、商業施設、飲食街が軒を連ねテーマパークとしての機能も併せ持つ。

北広島市は人口約６万人の中核都市であるが、道民の中での知名度は意外と低い。クラーク博士の名言「Boys, be ambitious」は北広島市の旧島松駅逓所で交わされた言葉ではあるがさっぽろ羊ヶ丘展望台で学生と別れたと信じている道民も多い。ところが最近はメディアの報道も多く全国的にも知名度が上昇中である。不動産価格も上がっており物件が不足する状態が続いている。

北広島医師会員は毎年増え現在は70名弱となった。新規開業、世代交代により若い世代も増えているのは心強い限りだ。市民病院や公的医療機関がない我が市にとっては医師会が中心となって市民の健康を支えている。中でも夜間休日救急に関しては夜間急病センター（市と医師会の共同運営）が365日午後７時から翌朝午前７時まで、それ以外の時間を市内の医療機関が輪番制で受け持っている。このように24時間365日カバーしている自治体は他に例を見ない。

北広島市は今後人口の増加はもちろんのこと他都市からの人や物の流通が飛躍的に増すであろう。北広島医師会としても大いに活気あるものとしていきたい。

再選に当たって

渡島医師会

会長　宮村　拓郎

６月の総会にて会長に再任されました。渡島医師会は、１市９町で構成され広域にわたっているため、会員全体が集まる機会としては、定時総会と新年会の年２回となりますが、渡島医師会管内のほぼ中央にある函館市での開催であるため、遠方の会員の出席は困難となっています。そのような状況を少しでも是正し、会員間の意見交換、情報交換を行うべく、「ブロック懇談会」を当医師会の３つの地域で開催していますが、開業医の高齢化による参加減少もあり、地域の開業医の先生方に加え、総合病院の勤務医の先生方との交流を深めていくことが重要と感じています。そのためには、若い勤務医の先生が参加しやすい講演会や意見交換のテーマを設定するなど、なるべく多くの先生と意見交換ができるよう心掛け、機会があれば、インターネットを利用した会議ができればと考えています。

また、会員だけでなく、その家族や職員の方々と共に音楽を楽しんだり、懇親を深めるための「納涼会」や「文化講演会」のブラッシュアップを図っていきたいと思います。

そして、渡島医師会の事業の１つに、子供たちへのがん教育に関する出前講座があります。子供たち自身が罹患する可能性の高いがんについての知識を深め、がん検診の有用性を認識してもらうことで、将来のがん検診の受診率が高まることが期待されておりますが、文部科学省による平成29年度におけるがん教育の実施状況調査の結果では、がん教育を実施した学校の割合は全体の約57％にとどまっており、がん教育を実施した学校のうち、外部講師を活用した学校の割合は、僅か約13％です。そこで、渡島管内の小中高校においては、日本医師会のがん教育の出前講座を大いに利用してもらうように働きかけ、がん教育の実施率を高めていただきたいと思っています。

会長再任のご挨拶

羊蹄医師会

会長　皆川　幸範

私が会長として２回目の道医師会後志ブロック医師大会を無事終了できましたので、世代交代をするよう引退希望したのですが、もう一期だけ会長を務めることになりました。ブロック医師大会では、前夕張市長で現北海道知事の鈴木直道氏に特別講演をしていただき大変好評でした。その後夕張市長を辞めたのですが、講演内容の彼の行動力や実績から、もう少し市長を続けていただきたかったというのが夕張出身の私の希望でした。ところで今年、羊蹄医師会から２名の先生が退会され、１人の先生が千歳市に開業予定で退会となります。千歳医師会の皆様、彼が入会の節はよろしくお願いします。倶知安町の耳鼻科開業の先生が閉院されましたが、いろいろ捜したが後任者が見つからなかったそうです。開業医の後継者問題が当地でもありそうです。開業医の閉院は、倶知安厚生病院の先生方の負担が増えることになります。日常診療でも昼食が午後１時を過ぎることが多々あるようです。患者さんも「厚生病院に行くと１日仕事だから」と紹介してもすぐに納得しない患者さんもいます。それでも先生のことを丁寧に説明し受診してもらうと、再診時に「紹介してくれていかったわ。」といってくれることが多くなりました。札幌や小樽にお願いしなければならない患者さんもいますが、羊蹄山麓の地域医療の中心が倶知安厚生病院であることは確かです。病院建て替え構想の中に、管内各医療機関との連携の充実が盛り込まれているので期待しています。先日、家の周りでは鈴虫の鳴き声が聞かれ、外国人観光客が増える季節が近くなってきました。診療の中心になる倶知安厚生病院では大変混雑しますが、開業の先生方も科を問わず外国人患者も診療していただいております。会員の先生方や道医師会の諸先生のご支援をいただき、もう一期頑張りますのでよろしくお願いします。

苫小牧市医師会長に就任して

苫小牧市医師会

会長　沖　　一郎

苫小牧市医師会は1947年に設立されてから72年を経過し苫小牧市、白老町、むかわ町、厚真町、安平町の１市４町で構成されております。苫小牧市は北海道第一の工業都市として自動車関連産業、製紙関連産業、石油精製や天然ガスのエネルギー産業など立地しております。白老町は製紙産業、漁業、畜産、さらに国立博物館ウポポイが完成し、全世界からの観光客が期待されています。厚真町、安平町、むかわ町は農畜産業、漁業が中心ですが、昨年の北海道胆振東部地震の震源地、被災地がすべて苫小牧市医師会の構成地域でした。

2018年９月６日の未明に最大震度７の地震が東胆振地域を襲い、揺れが収まって直ぐ全道が停電になりました。夜明けとともに医師会館に駆け付け、まず被害の全容を把握するために職員総動員で管内の医療機関および震源地に近い厚真町、安平町、むかわ町の医療機関の状況を調査しました。管内では苫小牧市立病院、王子総合病院を除いてほぼすべての医療機関が通常診療できない状態になっておりました。

直ぐに非常用電源のある苫小牧市夜間・休日急病センターの通常診療の手配をしていたので、医療機関の補完体制を整え、DMATの受け入れの準備と苫小牧市および３町の災害対策本部との連絡連携体制を整えました。この際問題になったのは福祉避難所の設置に関してです。一応、管内では病人、および介護、看護を必要とする対象者を収容するはずの施設を決めてはおりましたが、実際には人的問題、停電の問題で全く機能せず、苫小牧市医師会館に福祉避難所の設置の依頼が、苫小牧市および３町からきました。医師会館内には災害に備えて食料品の備蓄と折り畳みベッド、毛布、大量の水などの備えが準備されていたため、苫小牧市から貸し出された非常用電源にて管内に福祉避難所をすぐさま開設しました。医師会館内には訪問看護事務所があり、となりの苫小牧保健センターからも応援看護師、保健師が福祉避難所の運営に協力していただいたおかげで、在宅酸素療法の患者さん、重症糖尿病患者さん、重篤喘息発作の患者さんなど大勢の方々に利用していただきました。福祉避難所に関しては、これからも大きな問題が出てくることと思っております。地震から１年が経過して被災地域も次第に通常にもどってきています。苫小牧市医師会会員とこれからも力を合わせて災害に対応していきたいと思っております。

日高医師会長６期目を迎えるにあたって

日高医師会

会長　小松　幹志

日高医師会会長の６期目に再選されましたが、これまでの10年を振り返ると、医療が担う日高の姿は大きく変わってきています。まずは人口減少に伴う外来患者数の減少と高齢化に伴う疾患の多様性により、１医師や１医療機関のみでは治療を完結できなくなってきています。また当医師会会員も減少しているだけではなく高齢化が目立ってきております。この傾向は今後も続くと思われ、今後の日高の医療体制に大きな影を落としていくのではないかと危機感を持っています。

このような医療ニーズの多様化に加え、医師の偏在などを背景として医療機関における医師の確保が困難な中、質の高い医療提供体制を構築するためには、勤務環境の改善を通じ、医療従事者が健康で安心して働くことができる環境整備を推し進めていくことが重要ではないかと考えております。また北海道医療計画の日高地域医療推進方針として「日高圏域地域医療構想」が策定されておりますが、本構想では従来の青年壮年期の患者を主とする救急、治癒および社会復帰を前提とした「病院完結型」医療から、疾病と共存しながら生活していく高齢の患者を、地域の医療ならびに介護が支える「地域完結型」医療に重点を移していく必要があります。またこれに対応した病床機能の見直しも必要となるため、特に回復期病床の設置について日高圏域全体で取り組む必要があります。

そのためには専門医の不足している日高圏域において専門医による外来機能を充実させ、併せて病病連携・病診連携はもちろん自治体・介護施設等とともに医療・介護・福祉の連携推進を図り、地域医療構想の具体的展開や地域包括ケアシステムの構築に資するよう管内のネットワークを強化していく必要があります。そして私ども日高圏域の目指すべき医療体制の実現に向けて課題を抽出し、それに対する解決策を生み出していくためにも各医療機関との役割分担や認識の共有を図るべく積極的に意見交換の場を設けていきたいと思います。

全ての課題を克服するのは困難であるかも知れませんが、より良い取り組みを見出していけるよう会員の先生と一丸となって頑張りたいと思います。

２期目の会長を拝命して

岩見沢市医師会

会長　竹内　文英

2019年６月の岩見沢市医師会総会で医師会長を拝命しました。２期目となり、役員はほぼ留任とさせていただきました。

岩見沢市の人口は現在約８万１千人です。2006年には市町村合併で９万４千人でしたが徐々に減少しており、2045年には４万７千人に減少するとの推計が発表されています。医師会会員は122名（Ａ会員46名）で、４年前はＡ会員51名で５名減少しています。全国的に新規開業が減っており、将来の土日当番輪番制に不安を感じています。ある県のアンケート調査では診療所の継承が可能なのは25％、不可能が70％で、継承が可能な診療所は比較的人口の多い市に限られています。

南空知医療圏では岩見沢市立総合病院が中心的な役割を担っていますが、超激務な労働環境で疲弊しております。さらには医師の働き方改革という超難題が閣議決定されました。南空知の医療を維持するためには南空知の全市町村が参加しなければならないと思われます。

未曾有の超高齢化社会が到来するといわれています。国は地域医療構想、地域包括ケアシステム、在宅医療へのシフト等を考えていますが、有効な具体的な形はまだまだ見えてきていません。岩見沢市では在宅医療を行う医師は増えておらず今後の課題となっています。

看護職員の慢性的な不足が続いており、当医師会では准看護師育成事業を行っています。全国的には事業継続が困難で閉校している医師会も多く見られます。当校でも受験者数が減少しておりますが知恵を絞って生徒数を確保しています。

社会、医療の変化に対応できるよう、全員で知恵を出し合って考えていきたいと思います。

気が置けない仲間のネットワーク

空知南部医師会

会長　梶　　良行

当医師会は昭和30年６月15日に設立され、今年で64年を迎えました。初代会長は藤野武志、２代目は篠原正幹、３代目は柳澤　守、４代目の長岡淳一の各大先輩の後を受け小生が５代目の会長に指名されたのが平成15年４月、今日まで８期16年にわたり務めさせていただきました。しかしこの間、会長としての職責を十分に果たしたとは言い難く、申し訳ない気持ちでおりましたので、今回の再選により改めて身の引き締まる思いがいたします。

北海道では高齢化が進み高齢化率は2025年に34.4％、2040年には40.9％になると推計されています。また団塊の世代が75才を迎える2025年には認知症の人が700万人に増加すると予想されています。こうなると医療や介護を受ける人が増えてきます。お年寄りが住み慣れた地域でその人らしく生き続けるために私たちは何ができるのでしょうか。

外来で患者さんの“お薬手帳”を見て唖然とすることがあります。十数種類に及ぶ処方薬、全部飲んだなら逆に身体を壊すのではと心配になりますし、実際に処方された薬を指示どおり服用できているかも怪しいものです。また、同じ薬が別の医療機関から処方されていたりすることもあります。患者さんは薬が多くなってもなかなか医師に減らしてほしいとは言えないようです。投与薬剤数が多くなると、有害事象の発生率が上昇する危険性があるほか、残薬が増えるという問題もあります。患者さんサイドに立って薬の種類や量を減らせないか、処方医に伺うことのできる環境が求められます。減らせないのであれば、間違いなく正確に服用してもらうための支援が必要です。

一人の患者さんに寄り添うのは一人の医師だけでは足りず、薬剤師、歯科医師、保健師、訪問看護師、ケアマネージャー、さまざまな介護職、ボランティア等々の連携が必要です。そのために、お互いの顔が見える、気が置けない仲間のネットワークを作り上げることが私の望みです。

地域の魅力探しとルネサンス

旭川市医師会

会長　山下　裕久

ここしばらく旭川市の人口構成に目が向いています。というのが、市の人口が2015年の339,605人から30年後の2045年に248,360人に減少し高齢化率も上がるとの推計ももとより、その基礎となる現今の年齢別人口を見て愕然としたのです。今年４月の市人口は335,323人で、年齢別最多人数は69歳の6,640人、39歳は4,083人で、なんと０歳児は2,032人と最多69歳の30％に過ぎません。

日本の人口統計（2018年10月１日）でも、最多は69歳の214.8万人で０歳児は94.2万人と44％に減っています。大都会では若年人口の流入があって、賑やかさの中で気付かないのかもしれませんが、地方の若年人口減は究極の大都市流入減となって、日本沈没ならぬ日本人消滅です。この状態が続いて良いわけはありません。

直近、本州の都市で「公園での長縄跳び禁止」の報道がありました。子供の声がうるさいとの声が従前より聞かれます。そして、介護も含めて人手が足りないと言うのです。何かが間違っている。

若年人口減が国家的課題であり、働き方改革とあれば、保育費無償化政策のみならず、若者世代・子育て世代の所得を増して、心の余裕と夢と生きがいのある生活が必要と思うのです。地域でも何か良い手はないのだろうか。

８月末に道北ブロック会議が留萌市で催されました。留萌医師会の先生方12名の参加があり、協力し合い留萌市立病院を盛り立てながら地域を守る姿に感銘し、和気あいあいの懇親会がありました。留萌の海の幸に加え（特産和牛もあり）、大型船が寄港し暑寒別の美味しい水を大量に補給するので水道局は黒字！等をお聞きして、知られざる地域の力を教えていただきました。

地域の魅力を探して伸ばす。少しでも手助けになればと５期目の思いです。

４期目にむけて

根室市外三郡医師会

会長　杉木　博幸

不肖私が４期目の会長職を務めさせていただくこととなりました。これまでお支えいただきました皆様に心から感謝を申し上げますとともに、今後も変わらぬご支援ご指導いただけますよう宜しくお願いします。

さて、当地域の医師不足・医療従事者不足の深刻さは一向に改善の兆しがありません。限られたメンバーで有効な医療を展開し、また地域包括ケアシステムを構築していくためには、行政･公的医療機関･医師会や医療介護に関わる多職種の連携が重要であることは言うまでもありません。根室市では定期開催している連携ねむろ会や根室地域在宅医療多職種連携協議会などを通じ、医師同士や医療機関間、あるいは多職種間の顔の見える良好な関係が年々構築され、一丸となって患者の治療にあたるという意識が成就されつつあります。しかしながら、人口減少や少子高齢化による甚大なる影響が当地に襲いかかろうとしています。当地に就業している医療従事者は、定年後の再就職に応じていただき、体力・気力の限界まで従事していただいているのが実情です。一方、地元高校から医療を目指し都会に進学した若者達のうち、地元に戻る者は非常に少ないのが現状です。また開業医の高齢化も進み、何とか維持している保健・医療・福祉の現状をいつまで保てるか懸念されます。

こうした厳しい状況の中、本年８月に根室市出身の医師が市立根室病院に常勤医として勤務されました。また根室市出身で、将来根室市に戻り医師として勤務することを明言してくれている研修医もおり、大変頼もしく思っています。各医育大学における地域枠制度のさらなる拡充を希望してやみません。

当医師会としましては、今後も会員相互の連携を密に地域医療の維持・充実のために尽力いたすとともに、将来の医療従事者確保対策として行政と連携を深めるとともに、青少年への医療体験事業などの事業を実施して参りたいと存じます。

お知らせ

「応急手当WEB」「救急医療啓発パンフレット」へのリンク依頼について

◇救急医療部◇

当会ホームページでは急病・急な症状時の対応を紹介する「応急手当WEB」、救急医療機関の適切な利用について理解を深めてもらう「救急医療啓発パンフレット」を登載しております。

これらの情報をより一層周知することにご協力いただけます医療機関におかれましては、自院ホームページに下記掲載URLへのリンクをお願いいたします。

なお、リンク掲載後のご連絡は不要ですが、今後の連携強化のため、リンクのご一報をいただければ幸いです。

●応急手当WEB
http://www.hokkaido.med.or.jp/firstaid/

●救急医療啓発パンフレット
http://www.hokkaido.med.or.jp/hokkaido/ambulance.html

連絡先：北海道医師会事業第三課
TEL　011-231-1726　　FAX　011-210-4514　　E-mail　3ka@m.doui.jp